

統語論の授業についての覚え書き

高橋 保夫

0. はじめに

日本の英語学科、英文科などを持つ大学では高校までに学習するものとは少し異質な内容を持つ英文法の授業が開講されていると思われる。「現代英文法」、「英語統語論」、「英語学特殊講義」などといった講義題目で、扱うレベルによって、学習文法に対しての科学文法といった感じのものから、英文法という概念からは完全に乖離した印象を与える純粋な理論言語学といった感じのものまであるのではないだろうか。いずれにせよ、扱われる内容に英語学の中核をなす分野である統語論が含まれているはずである。小稿では、統語論の授業において、学生にどのような姿勢でその展開を図ったら良いのか、名詞に後続する前置詞句の順序を例に取り上げ考察したい。

1. 英語学の常識 ― 句補部と付加部の区別 ―

主要部に後続する前置詞句はその性質の違いから二つに分類される。次の (a) と (b) の前置詞句は、表面的には共に動詞の後ろに生じていて同じに見えるが実は違いがある¹。

- (1) He relied on the doctor during the operation.
(a) (b)

まず第1に、(a) は義務的な要素であり、(b) 随意的な要素である。第2に (a) と (b) との語順を入れ替えることができない。

- (2)*He relied during the operation on the doctor.
(b) (a)

第3に、(a) の前置詞句の目的語は受動文の主語になれるが、(b) の前置詞句の目的語は受動文の主語になれない。

- (3) a. The doctor was relied on.
b.*The operation was relied during.

第4に、(a) の前置詞句の目的語は Wh 疑問文で質問の対象になるが、(b) の前置詞句の目的語はなれない。

- (4) a. Who did he rely on ____ during the operation?
b.*What did he rely on the doctor during ____?

第5に、(b) の前置詞句は比較的自由に文頭に移動できるが、(a) の前置詞句はできない。

(5) a. *On the doctor he relied during the operation.

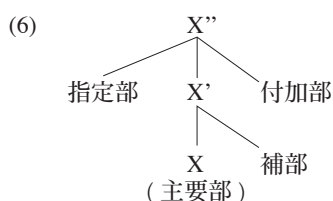
(a)

b. During the operation he relied on the doctor.

(b)

このように表面的には (a) も (b) も同じに見えるが、違う働きをしている。この違いを生じさせているのが動詞との結びつきの強さである。(a) の前置詞句のように動詞との結びつきが強い要素を補部 (complement)、(b) のように動詞との結びつきが緩やかな要素を付加部 (adjunct) と呼ぶ。

補部と付加部の区別は (1) のような動詞に続く要素についてだけ成り立つのではなく、名詞、形容詞、前置詞などに続く要素にも成り立つ。したがって、句の構造というのはその句の中心となる語、主要部 (head) と補部でまずコンパクトなかたまり (構成素) が作られ、それに付加部と限定する働きをする要素、指定部 (specifier) が一緒になりより大きな構成素が作られる。このことを V とか N とか個別の範疇の名前ではなく、変数 X を使って表せば (6) のようになる。この範疇に共通性して見られる構造の階層性を捉えた原理は X バー理論 (X-bar Theory) と呼ばれ、Jackendoff (1977) 以来、いわば英語学の常識になっている²。



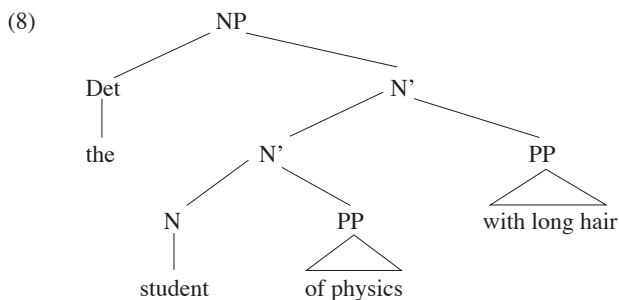
2. 常識を覆す指摘 — 久野 (2006)、久野・高見 (2007) —

句の構造は範疇を越えて共通しているということであるから、次に名詞句を例に取り、補部と付加部の生起する順序について考えてみる。

(7) a. the student [of physics] [with long hair]

b. *the student [with long hair] [of physics]

(7a) が適格なのは、補部の of physics が付加部の with long hair よりも主要部名詞 student に近い位置に現れているからであり、(7b) が不適格なのは、付加部の with long hair が補部の of physics よりも主要部名詞 student に近い位置に現れているからである。このことは X バー理論から自動的に出てくる。誰も疑いもしない常識である。(8) の句構造でもわかる通り、補部 of physics は主要部名詞 student の直後に、付加部 with long hair はその後に生成されている。つまり、補部 of physics は N の姉妹 (sister)、付加部 with long hair は N' の姉妹という関係になっている。補部は補部、付加部は付加部として機能している限り、補部 - 付加部という順序はいくら言語事実を見ていったとしても変わらないはずである³。



よって、補部と付加部の順序に関しては、(9) のように主張することができる。

(9) 補部の前置詞句は常に付加部の前置詞句よりも主要部に近い位置に現れる。

しかし、久野 (2006)、久野・高見 (2007) では付加部 – 補部という順序で完全に適格な例があることを指摘している⁴。(イタリック体の要素が付加部、太字の要素が補部)

- (10) a. The attack *with missile grenades* **on the police head quarters** caught the coalition forces by surprise.
 b. Lack of interest *on Mary's part* **in social work** surprised me.
 c. I would have preferred a meeting *in a less formal setting* **with friendlier union members**.
 d. Pictures *in post offices* **of the ten most wanted** have been far less effective than Walsh's "America's Most Wanted."
 e. The nomination *by the President* **of Harriet Miers to the Supreme Court** angered the ultra-conservative wing of the Republican Party.
 f. The impeachment *by the Congress* **of sitting presidents** doesn't take place too often.
- (久野・高見 2007 : 39)

そして久野 (2006)、久野・高見 (2007) は以下の議論から (9) は間違っていると結論づけている。

まず、付加部 – 付加部の順序は自由ではない。

- (11) a. a vase of glass with roses
 b.*a vase with roses of glass

なぜなら、付加部の前置詞句の積み重ねに関して主要部名詞の本質的な特性を表すものが、非本質的な特性を表すものより主要部名詞に近い位置に現れなければならない、という制約があるからである。

- (12)
- | | | |
|--------|----------|------------|
| a vase | of glass | with roses |
| | 本質的な特性 | 非本質的な特性 |

る。もう一步進んで、問題の言語事象に関するデータを集め、問題のパターンの意味や談話法制的制約を考慮に入れながら分析を行えば、すぐに反例が見つかり、(9)は補部と付加部の非対称性を表すものではないことが直ちに明らかになったはずであると述べられている。久野・高見(2007:54)でも構文研究を行う際には、これまでに提示されている分析を鵜呑みにせず、できる限りの多くのデータでその分析を検証し、統語的要因だけでなく、意味的、機能的、語用論的要因も関与しているのではないかという点を念頭に置くことが大切であると述べられている。

福井(2001)は、理論言語学の教育に必要なものとして、二つの点を挙げている。

- (17) a. 段階を踏んだ教育の必要性
- b. 科学的探求の本質を伝えることの重要性

(17a)は当たり前のことだと思われるが、日本ではしばしば無視、あるいは軽視されているという。統語論に関して言えば、データを見てそこに現れるパターンを句構造規則や変換規則という形で形式的に表現したり、されにそれから規則性を抽出して「制約」や「原理」という形で述べたりする訓練を経ずに、一気に(最近の)極小理論のモデルに関する論文を「読む」などということも頻繁に行われているようである。これでは、古典力学(およびそれに伴う数学的・技術的道具立て)きちんと学ばずに、相対論や量子力学の論文を「読む」ようなもので、分野に対するしっかりとした理解を得ることは、とてもではないが不可能であろうと述べられている。(福井 2001:221)

(17b)に関しても次のように述べている。一見無関係に見える事柄(現象、法則、仮説、等々)の間に関連性を認め、それらを結合するプロセスこそが、科学研究において最も創造的な部分であり、研究者を発見の興奮に誘う部分であると思われる。従って、言語学を含む科学教育においては、科学の成果をただ単に「他の人たちが」行った、出来上がった知識の集積体として「学習」を強いるのではなく、仮説発想のプロセスを重視し、出来ればそれを追体験させるような配慮が重要であると思われるが、日本における言語学教育では、この「科学研究における創造性」の重要性は、ほとんど全くといっていいほど、認識されていないようである。(福井 2001:240)

久野(2006)、久野・高見(2007)、福井(2001)の主張はまさにその通りで、そこまで徹底してやれるかどうかは別にして、言語学の教育での基本的な姿勢になると思われる。そうすると、この小論で取り上げた主要部名詞に後続する前置詞句の順序の問題ではどのようなことになるだろうか。久野(2006)、久野・高見(2007)による指摘もX_{bar}理論の基本原則に異を唱えるものではなく(久野 2006a:82)、そこから出てくる主張に対する指摘であるから、句の構成に関する基本原則を説明した後、順序に関しては、当然の帰結では(9)になるが、実際は(14)に支配されているとするのか、それとも最初から(14)を導くように議論していったらいいのだろうか。その前にもう一度確認しておくべきことが

あると思われる。

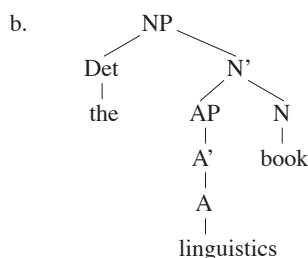
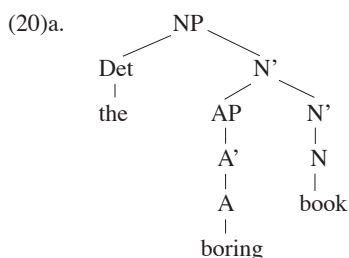
久野 (2006)、久野・高見 (2007) では、主要部名詞に後続する前置詞句の順序を主要部名詞に先行する形容詞に関する Quirk et al. (1985) のジェネラリゼーションと同じであるとして (14) を設けているが、付加部内での順序と補部に関わった時の順序とでははっきりとした差があるのに、補部と付加部を一緒にして、それをスケールのなものに置きかえることができるのかどうか。

- (18) a. the big boring red linguistics book
 ?b. the boring big red linguistics book
 ?c. the red big boring linguistics book
 *d. the big boring linguistics red book
 *e. the big linguistics boring red book
 *f. the linguistics big boring red book

(Carnie 2002: 124)

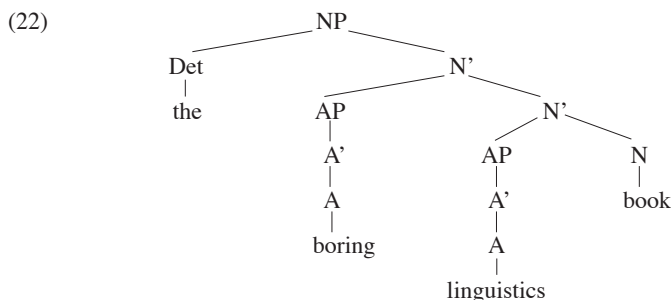
また、(19) のように形容詞が 1 つしかない場合を考えてみると、構造的には、(19a) の boring は (20a) に見るように N' と姉妹の関係で付加部であり、(19b) の linguistics は (20b) に見るように N と姉妹の関係で補部である。

- (19) a. the boring book
 b. the linguistics book



形容詞が 1 つしかない場合ですでに、はっきりと主要部との関係が決っているので、(21) のように 2 つある場合にも、(22) のようにそれぞれの場所が明確になっている。すなわち、補部の linguistics の方が付加部の boring よりも主要部の book に近い位置に来ることが明確になっているのである。

- (21) the boring linguistics book



一方、久野（2006）、久野・高見（2007）では、形容詞が1つの場合、(23)のようになっている、形容詞が2つの場合、(24)のようになる。

- (23) a. the boring book
より非本質的
b. the linguistics book
より本質的

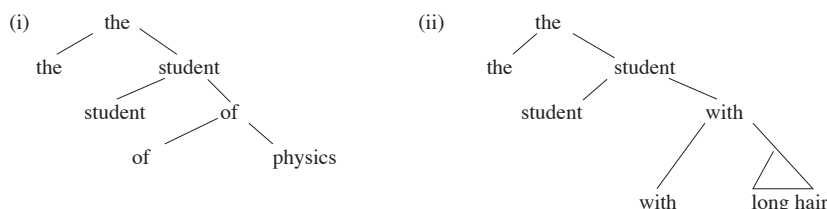
- (24) the boring linguistics book
より非本質的 より本質的

形容詞が1つの場合に名詞との関係が明確になっておらず、形容詞が2つになって初めてどちらがより本質的なのが決るように感じられる。1つの場合でも名詞との関係が明確になっていると主張するのであれば、それはある意味、補部と付加部の違いによる説明を利用しているのかもしれない。なぜなら通常、補部は付加部よりもより本質的になっているものである。実際は補部、付加部の違いによって順序が支配されているのに、その結果だけを見てどちらがより本質的になっているかということを記述しているにすぎないのかもしれない。どちらの説明により説明力があるかは明白である。したがって、(10)の例から(9)は(14)の制約に置き換えられなければならない（久野・高見 2007：45）とすぐに結論づけることはできないと思われる。補部と付加部の違いによる説明を排除せずに、なぜ(10)のような有標の順序が可能なのかを、これから考察していくような姿勢が理論言語学とまでいわなくても大学レベルでの英語統語論、英文法の教育には必要なのではないだろうか⁶。

注

- 1 中島（1995）から引用である。
- 2 本稿では、Radford（1981, 1988）の構造を用いる。
- 3 極小理論（Minimalist Program）では、Xバー理論が破棄され、最小句構造（Bare Phrase

Structure) 理論になった。文構造はボトムアップ式に構築されるので、(8)の補部と付加部の違いは(i), (ii)のように同一の構造が与えられてしまい、区別できなくなってしまった。Chomsky (1995: 246)を参照。



- 4 本稿では、補部・付加部の非対称性に基づく主張を1つだけ取り上げたが、久野（2006）では9つ取り上げている。また、用語に関して久野（2006）、久野・高見（2007）では補部ではなくて、機能・意味的な項（argument）という用語を使っている。付加部は付加詞という用語を使っている。久野（2006）で取り上げている形容詞的用法の項・付加詞前置詞の非対称性に基づく9つの主張とは、本稿で議論した(i)項の前置詞句と付加詞の前置詞句の相対的位置の他、次の8つである。(ii)数量詞のスコープ、(iii)項・付加詞前置詞句の中のWh-in-situ表現、(iv)項・付加詞前置詞句の中のWh表現のWh移動、(v)前置詞句の積み重ね、(vi) One-Substitution、(vii) Be [of NP] 構文、(viii) 前置詞句の外置、(ix) 主要部名詞に先行する形容詞的用法の名詞である。この内(vii)以外にはすべて機能的代案を提出している。久野・高見（2007）では(i)と(v)と(vi)が再録されている。
- 5 less inherent, more inherentは久野（2006）、久野・高見（2007）による加筆である。
- 6 ちなみに、久野・高見（2007）では、「項>付加詞」の順序で生成された前置詞句の間に「かき混ぜ」規則が適用され、そのアウトプットに「前置詞句積み重ねの順序」制約がフィルターとして適用されるものと考えられると述べられている。久野・高見（2007：45）

参考文献

- Carnie, A. 2002. *Syntax: A Generative Introduction*. Blackwell Publishing.
- Chomsky, N. 1995. *The Minimalist Program*. MIT Press.
- 福井直樹. 2001. 『自然科学としての言語学——生成文法とは何か——』大修館書店.
- Jackendoff. 1977. *\bar{X} Syntax: A Theory of Phrase Structure*. MIT Press.
- 久野暲. 2006a. 「統語的説明と意味的・機能的説明<上>——いわゆる「項と付加詞の非対称性について」——」『月刊言語』2006年1月号, pp.82-92.
- 久野暲. 2006b. 「統語的説明と意味的・機能的説明<下>——いわゆる「項と付加詞の非対称性について」——」『月刊言語』2006年2月号, pp.80-90.
- 久野暲・高見健一. 2007. 『英語の構文とその意味——生成文法と機能的構文論』開拓社.

- 中島平三 . 1995. 『ファンダメンタル英語学』 ひつじ書房 .
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. and Svartvik, J. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Radford, A. 1981. *Transformational Syntax*. Cambridge University Press.
- Radford, A. 1988. *Transformational Grammar*. A First Course. Cambridge University Press.